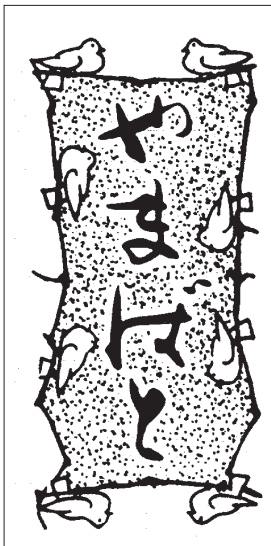

発　行
社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園
〒421-0412 静岡県牧之原市坂部2151番地2
TEL:0548-29-0221 FAX:0548-29-0157
E-mail:honbu@yamabatogakuen.jp
http://www.yamabatogakuen.jp/
郵便振替　00800－6－14641
頒価年額600円(〒共) 1部100円(〒共)
(送料・消費税込み)
寄付金の一部に購読料を含む場合があります。

いろいろな変化

（一）

今は三月中旬ですが、各地から、「さくらが開花した」とのニュースが届いています。いよいよ春到来。当地でも、日に日に、一年で最も色彩豊かな、美しい風景を目にすることになるでしょう。

当法人の施設、例えば、「やまばと希望寮」や「ケアセンターさざんか」では、豊かな自然に囲まれているので、コロナ禍の中でも可能な限り散歩を楽しんでいます。今後ますます散歩の機会が増えるでしょうから、うれしいことです。

ところで、やや唐突ですが、機関紙に関するニュースを、二つ、お知らせしたく思います。

これまで「やまばと機関紙」発送には第三種郵便を活用し、その恩恵にあずかってきましたが（封筒切手代32円）、今回から利用を止め、普通郵便や宅急便を使うことになりました。その背景には、「読者の八割以上が機関紙を有料で購入していなければならない」という認定条件に関し、私どもは個別にではなく全体として八割以上の購読料を計上していればよいと考えていた（このこともかつては容認されていた）のですが、近年は調査が年々細かくなってきたことがあります。例えば、毎月機関紙を発行しているが、年に一回しか応答しない人の購読料はどうなっているか等、個別の証拠提出なども求められるので、その対応に費やす労力もかなり大変であり、このさい、これまでこの特典にあずかってきたことを感謝し、今後は利用しないことにした次第です。

（二）

数か月前には、第三種郵便の利用を続けたかったので、読者の皆様に購読の有無について問い合わせ、お手数をおかけしたのでしたが、結果的には利用しないことになり、別にそんな問い合わせ（購読するかどうか）をしなくてもよかったことになります。

ですが、このことをきっかけにして、機関紙中止を言いそびれていた人や、漠然と読み続けていた方が、決断する機会になり、物事を整理する機会になったことは良かったとも思われます。当法人でも、おびただしい数の機関紙を送っていましたが、皆様からの応答に従って適切な発送数に変更できたので良かったと思っています。

なお、機関紙最初のページに「頒価年額」とか「購読料」という言葉が残っていますが、これは、（寄付金を記録するパソコンのシステム上、今後も自動的に寄付金と機関誌代とを分ける操作が続くため、この言葉を残したもので）無視して頂いてもよいし、購読料として送って頂いても構いません。

お伝えしたい二つ目のことは、今回から機関誌の発行が、四月、六月、八月……と、偶数月に隔月に発行されるようになることです。毎月の発行は、関係者にとってやや負担になってきたためで、ご了承いただければ幸いです。創設期には、機関紙の発行回数は年に四回でしたので、実情に合わせて発行回数は改善され変更されてきたことがわかります。今後も、読者の皆様と良いコミュニケーションをとれるよう願いながら、適切に対応していきたいと願っています。

（三）

三月は、人事異動発表の時期で、四月からは、新しい体制の下、新しい年度が始まります。例年だと、異動に伴うお別れ会や、年度末のねぎらい会も開催されるのですが、本年度はコロナ感染防止のため、それもかなわず、三月の施設管理者会（Zoom）の最後の時間帯を利用して、異動される管理者の皆さんに施設長たちが感謝の言葉を伝え、ご本人からも挨拶を頂きました。該当する方たちは四名で、体力的な衰えを感じ支援員として働きたいと申し出たAさん（29年勤務）、定年退職で退いた後、非常勤支援員として働く予定のBさん（34年）、定年後も管理者の役割を続けていましたが後継者が見つかったので現職を退き非常勤の支援員になるCさん（20年）、そして、引き続き管理者として留まりますが、異動により別の施設へ移ることになった、一番若いDさん（15年）です。

ご本人一人一人に対する仲間の施設長たちからの感謝の言葉を聞きながら、そうだなあ、長年にわたっていろいろと助けて頂いたなあ、なくてはならない働きをして頂いたなあと、改めて感謝の念でいっぱいになりました。Cさんが「不思議にも、こんなにも長くこの仕事に携わるようになったが、障碍を持つ人との出会いは楽しく、ご利用者の皆さんにむしろ支えられてきた。人生で最も悲しい出来事に見舞われたときもこの人たちとの交わりがあったからこそ、癒され慰められた」と語りましたが、どの管理者も、同様の気持ちを抱いたのではと思います。

「諸行無常」は人生の常で、「変わること」こそ、変わらぬ真実だと言えますが、いろいろな変化を喜んで受け入れ、新しい人との出会いに恵まれますよう、いずこにおいても、周囲の人々と喜びを分かち合って歩めますよう、神様の祝福をお祈りしたことです。

〈理事長〉長沢道子

（3ページからの続き）

とっていただくことが、実は神様の当初からの計画だったのかもしれません。

ところが、幸か不幸か、理事長が依頼したのが、力もなければ考えも浅はかな人間だったために、実行力のある方々が次々に投入されてきて、気がつけば、出版一大プロジェクトが立ち上がっていた、そんな感じがしたのです。

それが、とてもはっきりしたのが、ラグーナ出版から本の帯を作る話が出たときです。せっかくなら、手前味噌な褒め言葉を自分達でひねり出すより、誰かに読んでもらって感想をいただきたい。ご存命なら、やまばとと関わりの深かった日野原先生にお願いしたかった。そう思っているときに、カトリックの晴佐久（はれさく）昌英（まさひで）神父様のお名前が出ました。力強い説教と行動力で大人気の神父様です。恐る恐る御連絡すると、なんとお引き受けくださるというお返事！しかも、我が家からすぐの教会におられるとのこと。早速原稿を持参しました。

神父様はその場で原稿に目を通し、一般の読者の視点からわかりにくい部分を指摘し、改善策を編集という視点から提案してくださいました。予想外の展開に「牧師、神父、総登場だぞ。後はお前の仕事だ。とにかく前に進め！」と神様に背中をドンと押されたような気持ちになりました。

その神父様からいただいた素晴らしい推薦の言葉を見た理事長はちょっと涙が出たとおっしゃいました。でも、涙が出るのは神父様の言葉だけではありません。沢山の寮生とそれに関わってこられた理事長はじめ多くのスタッフの皆様の人生に、心が洗われ、時に笑い、時に涙する五〇年の記録が、ここにぎっしりと詰まっているのです。

そんな経緯で書店に並ぶことになった五〇年記念誌。ぜひご購入ご一読いただきたくお願いいたします。皆様が読者となって支えてきてくださったやまばと学園五〇年の成長の様をご覧いただくと、きっと、そこに関ってくださったことを、幸せに思っていただけるのではないかと思います。

ご関心をお持ちいただけるようでしたら、左記、ラグーナ出版へご一報ください。

電話　099-219-9750
FAX　099-219-9701
メール info@lagunapublishing.co.jp

創立五〇周年記念誌ができました！

佐光紀子

五〇年の記念誌を作りたいから、過去の機関紙からよい記事を抜粋してまとめてほしい。長沢理事長からお電話をいただいたのは、一年半ほど前だったでしょうか。事を簡単に考えてお引き受けした私の元に、創刊号から今に至るやまばとの歴史が詰まった、ズッシリと重い宅急便が届きました。

目を通していくうちに、高い理想と地を這うような現実のギャップの中で運営を進めていく、時に厳しく、高貴な巻頭言と同時に、日々の寮生の暮らしの明るい描写、スタッフのみなさんの温かい視線に目を奪われました。それにもまして強く心を動かされたのが、寮生達とのふれあいを経験して自分達と状況の違う人達への目が開かれていく中高生や大学生の感想や、学園に感謝しながらも、親としての義務を放棄しているのではと悩まれるご家族の言葉でした。

簡単にまとまるだろうという予想とは裏腹に、自分でもどうしたらよいのかわからない程の量の記事を選び出してしまい、とはいえ、どれももったいなくて落とせない、といった状況の中で編集作業を始めました。まずは印刷された機関紙をパソコンで作業できるようにデジタル化しなければなりません。そこで、障がいのある方々の高校卒業以降の教育に取り組む「みんなの大学校」の引地達也学長に相談し、長沢理事長の賛同を得て、学生さんに入力をお願いしました。学生さんのアルバイトにもなるし、業務経験にもなると思ったのです。

ほどなく、引地さんから「長沢巌さんの余りに高い志に圧倒されました」という連絡が来ました。すっかり長沢巌初代理事長の人間性とやまばと学園のパワーに引き込まれた引地さんは、読み物としてより魅力的にするために、長沢現理事長のインタビューも入れた方がよい等、いくつもの提案をしてくれました。

おおよその形がまとまる頃にはこれを記念誌にとどめるのではなく、少しでも一般の人々に資する形で世に出せないかと、引地さんと私の間で話をするようになりました。「ここはどうです？」と引地さんがつないでくださったのが鹿児島のラグーナ出版です。病気が治ったから働くのではなく、働くことで回復をはかれる職場作りをめざして、就労継続支援A型事業所として会社を設立し、精神障がいを抱える方々とともに、本作り、会社運営を行ってこられた非常に特徴のある出版社さんです

インタビュー記事の構成、一般の読者の方々も意識した文章を考えるにあたり、編集に参加してくださったのが、学園の理事であり、NPO法人ホッとスペース中原の代表でもある佐々木炎牧師です。構成の順序、本の装丁など、的確な判断とご指示が、佐々木先生から天の声のように振ってきます。

こうして本の編集が佳境に入ったあたりで、私は、当初請け負った機関紙をまとめる作業とは全く別の方向に導かれているのを感じるようになりました。

重度の知的障がいのある方々の生活・教育拠点を作ることから始まり、高齢者介護にまで裾野を広げていったやまばと学園の活動を通して、年をとっていわゆる健常者の状態から離れていくことは、障碍を持つことによく似ていることを学びました。それが生まれた時からなのか、後天的になのか、加齢によるかは人様々ですが、人がこの健常という状態から離れずに亡くなることはまれなのだと、編集を通して理解できたように思います。

一方で、健常から離れていく家族を受け入れ、一緒に生きていくとはどういうことか。施設にお世話になることは、必ずしも介護する側が苦難から逃げることではなく、施設に入る方の生活の質を担保することになることにも気づかされました。そうしたことを世に問うべく、この本を一般の方々に手に

（2ページ、2段目に続く）

利用者Kさんに教えられたこと

相寿園　松下 静乃

「俺はこんなところに入れられた」常に険しい表情、怒鳴るような口調、少し厄介な方が入所してきたなというのが、私のKさんに対する正直な印象だった。

Kさんとの日常が始まった。私の不安は的中した。それは想像以上だった。日々の要望は人一倍、何を行うにも自身で決められず、失敗すれば「あんた、が言った」「決めた、あんたが悪い」と全て私たち職員に責任転嫁。Kさんとコミュニケーションが上手くとれずに悩んでいた私だったが、ある日の些細な出来事がKさんとの関係を好転するきっかけとなった。それは洋服の着る順番のやり取りであった。「どれから着るだ?」といつものぶっきらぼうな口調で言われた。

私は理解してもらえるように時間をかけ丁寧に説明し、メモにも残した。するとKさんは安心した表情でニッコリと微笑み「ありがとう」。入所されて二年目に初めて聞く言葉とその時の笑顔が、今でも鮮明に思い出される。

私が当たり前に「できる」と思っていたことがKさんには難しかったということ、そして一つひとつのことがスムーズにできなくて次に進めなかったということを、やっと知ることができた。この日を境にKさんとの距離を縮めていくことができた。私は表面的な言動にとらわれて「Kさんは困った人」だと決めつけていたのだ。Kさんの生い立ちを振り返り、病歴、性格なども改めて分かった上での丁寧な支援が必要だと感じた瞬間だった。

当施設では、認知症、精神疾患、重度な持病を患われている方が入所している。入所者一人ひとりに寄り添った支援が求められている。現状の方法だけでなく、より良い支援に近づくように常に模索しながら仲間の職員と共に利用者の「ありがとう」の言葉と「笑顔」を引き出していける仕事をしていきたい。こんな気持ちにさせてくれたKさんに、私のほうから「ありがとう」なのです。

（相談員）

コスモスの春夏秋冬

ワークセンターコスモス　大塚 みなみ

私は法人に就職して十年、ワークセンターコスモスでサービス管理責任者として働かせいただいてからは三年になります。

就職して十年間いろいろな思い出がありますが、大切な思い出のひとつ、季節に関連することをお伝えいたします。

春　コスモスの玄関前には大きな桜の木がありますが、それを見ると「あー今年も春がきたねぇ」と皆で春を感じます。花より団子、桜の下でお団子を食べたい所ですが、お餅は喉に詰まらせてしまうおそれがあるため、目で桜を感じています。

夏　以前は近隣の島田第二小学校のプールを借り、水泳をしていたそうです。年月と共に変化し、コスモスの夏の風物詩は、流しそうめんへと変わっていきました。

皆さん大喜びで、汗を流しながら「おいしいね」と言い合い、流れてくるそうめんを食べます。木に蝉が沢山とまるため、虫取り網を持ち蝉取りに行った事もありました。もちろんキャッチアンドリリースです。

秋　コスモスの花壇には一年中花が咲いています。隣のお家の方からは「いつもお花が綺麗に咲いているね」と言われます。地域の方々も温かく見守って下さり、一緒にお花を楽しんでいます。

冬　毎年、島田高校の学生さん達と交流会を行います。吹奏楽部による生演奏を聴き、学生さんとバルーンアートをします。吹奏楽部の演奏に合わせ、一緒に踊ったり、エア楽器演奏をしたりと、とても楽しい交流会です。昨年はコロナ禍でもあり、違う形で行いましたが、今後も毎年行いたい行事の一つです。

この春には、施設長が、高松施設長から石神施設長に替わることになりました。たくさんの出会いと別れを繰り返しながら、想いを繋いでいきたいと思います。

（サービス管理責任者）

コロナ禍の下で

希望寮　中村 恵理子

私達は未だに特別な時を過ごしています。昨年二月二十八日に静岡県でコロナ患者が発生。その後、感染は収まらず、四月に緊急事態宣言が発動され、三密の回避、マスク着用、手指消毒など新しい生活様式が奨励されました。施設では消毒液やマスクが足りず、マスクを洗濯し、使い回した時もありました。

第二波がきた七月と八月は「特別な夏」と言われ、世間では旅行や帰省が取り止めになりましたが、施設では職員はマスクをしての散歩で、熱中症のリスクと隣り合わせでした。十一月には第三波が始まり、「静かな年末年始を」と呼びかけられました。行楽シーズンにも関らず、施設ではドライブでの小外出。お弁当は持ち帰り、作業棟で食べていました。

そして年が明け、八日に再び、緊急事態宣言が発動されました、コロナウイルスは冬期に流行するのが常なので、粛々と感染予防を行いました。ここまで、利用者、職員共々感染から守られた事を感謝しています。

今、私達は新型コロナウイルスのワクチン接種に、一縷の望みを抱いています。それまで、もうしばらく感染予防策が必要です。否、ワクチン接種後もそれらは継続すべきでしょう。

この間、利用者は、帰宅、外出、訪問マッサージ、散髪等を中止したまま、暮らしてきました。職員共々、よく乗り超えてきたものだと思います。しかし、油断禁物であることを肝に命じて、この春を迎えたく思います。

（看護師）

「遊びりテーション」IN坂部

コミュニティセンター ぶどうの木　曽根 きよ野

一月十五日、地域貢献活動の一環として、坂部地区の「ふれあいサロン」に、グレイス、すずらん、シャローム、ぶどうの木の職員六名が参加しました。

コロナ禍で施設への行き来ができない中、やまばと学園に対する応援の気持ちを常にもっていて下さる皆様に感謝し、「遊びりテーション」と称し、地域の方と直接触れ合う時間をつくったのです。

まずは、職員が、お神楽、狂言師、傘回しに扮して登場し、楽しくスタート。はじめはぶどうの木で実施しているストレッチ体操の「柔」です。柔の歌に合わせて新聞棒を使い、みなさん笑いながら実施。次に「ジャンケンリレー」。支援者の方々を含む三十人程の参加者を三チームに分け、ジャンケンで負けたらバトンを渡していきます。バトンを早く渡したチームが勝ちなのですが、いざ負けるとなるとなかなか難しい…。あいこが続くとバトンが進まない…。運もあり、笑いもあり、みなさん夢中でした。最後に「新聞は続くよどこまでも」。一枚の新聞を順に破りながら、チームでどれだけの長さになるか競います。細く長く…、繊維に沿った方がいいね…など、それぞれ作戦を練り、協力して取り組んでいました。

やまばと学園の各事業所の説明についても、皆さん興味深く耳を傾けてくださいました。活発な質問が飛び交い、坂部地区の皆さんが学園の取り組みを受け入れてくださっている思いが伝わってきました。

今回の交流に感謝し、今後も、楽しく続けていきたいと考えています。

（副主任支援員）

歩みのあと

（2月1日～2月28日）

〈法人〉計画策定委員会に長沢理事長が出席。(2)／介護保険事業計画策定懇話会に長沢理事長が出席。(4)／第三次補正ヒアリング。3月5日まで(25)

《垂穂寮》介護スキル研修（全体職員研修）。(15)／誕生会(26)／赤堀由砂医師が2月から垂穂寮嘱託医に加わる。

《みぎわ》節分で豆まきを行った。(2)／職員が島田第二中学校で、福祉の仕事（みぎわでの仕事）について話をした。(18)

《野ばら》節分の会(3)／事故報告なし。

《やまばと希望寮》節分行事(3)／給湯設備（エコキュート）不具合発生。タンクより水が漏れ、修理を依頼。／配膳用エレベーター不良箇所あり、修繕困難。食事提供体制について検討していく。

《わかば・もくれん》もくれん夜勤専属勤務職員採用。／掛かり増し費用にてオゾン発生器、空気清浄機を購入。

《さざんか》避難訓練(26)

《カサブランカ》節分行事。利用者さんにお菓子を配る(2)

《希望の家・ふれあい》島田市へ土地の借受期間更新申請書提出（ふれあい）

《コスモス》12月31日から島田市民病院に入院中のIさんが2月10日腎不全のためご逝去。島根県から静岡県にきて、九年間ともに働くことができ、ありがとうございました。／毎年のブラッシング指導。島田市歯科衛生士に来ていただき、歯・歯磨きの大切さをエプロンシアターで教わりました。歯垢染色液で赤く染まった歯も（プラーク）歯科衛生士さんの丁寧なご指導により、みんなの歯がピカピカに。8020（80歳で20本以上自分の歯を保つ）を目ざしてがんばるぞおぉー!!(24)

《なのはな》防災パトロール（火災から四年）(27)／受託作業量が増加し、嬉しい悲鳴。

《あさがお》初倉地区民生委員様より昼食を提供して頂く。(11・23)／2月1日～5日、吉田特別支援学校高等部2年生、職業体験実習。／段ボールやアルミ缶回収用・書類保管用の倉庫を駐車場に設置。

《WoCやまばと》牧之原市認定農業者協議会様より農産物品（果物、お茶）をいただく。／就労支援B型指定更新（令和3年4月1日～令和9年3月31日）

《かたくりの花》小グループに分かれ、ささやかな職員親睦会。「あっち向いてホイ」等のゲーム後、お互いの良い所を伝えあい、最後にお楽しみBOXのプレゼント。笑顔になり心和む時間となった。(18)／節分。蜜を避けるためいつもと違った形だったが、盛り上がる。(11)防災訓練実施。昼食は、防災食のみそラーメン。ご利用者は「ラーメン大好き」と大喜び。(2)

《さくら》事故報告書様式が変更になり、書きやすくなった。ヒヤリハット報告書を新規作成。／「吉田町総合障害者自立支援施設」の指定管理者として選定された。(8)

〈マーガレット〉歯型の模型を使った口腔ケア研修（利用者研修）説明。ブラッシング後、染色液を使い、磨き残しをチェック。自分で確認することで、丁寧に磨く大切さを自覚できたよう。(26)

〈レタスクラブ〉利用者Rさんが登所途中、土手沿いに大きなゴミを沢山見つけたので、散歩がてら湯日川ゴミ拾い。沢山回収し、土手の風も爽やか。(15)

〈生活支援センターやまばと〉牧之原市計画策定委員会。(2)／志太榛原地域運営会議。

〈聖ルカホーム〉稼働率100％。／ユニット毎、節分の豆まきやおやつ作り。／歯科衛生士による口腔ケアの重要性について研修。

《グレイス》「河津桜」のお花見ドライブ(12・16・25)ユニット単位で久しぶりにお出かけ。／身体拘束フォーラム（YouTube）。限定公開の為、全職員視聴できた（1日～28日）

《相寿園》外出もままならない中、「映画観賞会」。リクエストの多かった「釣りバカ日誌13」を大型スクリーンにて上映。会場の大広間は映画館の雰囲気そのもの。ポップコーンやコーラはなかったものの、上映終了後、ジュースとカントリーマアムが提供、皆さん、大満足。(23)

《ぎんもくせい》保健所へ浴槽水検査依頼(12)／尾川地区自治会の方々、桜の木を消毒して下さった。(16)

《真菜》くもん学習療法のポスターを発表。

〈すずらん〉「身体拘束廃止フォーラム」動画を全職員視聴、意識づけの良い機会となった。（1日～28日）／ご利用者が増えているが、職員が育児休暇中等で不足の状態、パート介護福祉士募集中。

〈さくらん〉高橋管理栄養士（聖ルカ）による介護食の研修。(18)／県ヘルパー協会のリーフレット作成に協力。職員が取材を受けた。

〈シャローム〉1月に引き続き、新型コロナ感染の不安からサービスの利用控えが見られる。3月あたりからは利用再開の意向が聞かれている。／ケアマネ1名異動のため、後任を募集中。

《オリーブ》啓発事業。地域のいろいろのサロン活動に参加し、料理や栄養のお話や、ゲーム等を実施。(3、10、25)／仕様書の説明から令和三年度は7・1人区の配置と週19時間の事務配置が決まる。

（ぶどうの木）節分「桃太郎と鬼退治」豆まき。（1日～5日）／次年度からの短時間リハビリテーション事業（仮称）の開始に備えて職員1名を増員。

ボランティア活動

★活動者名（敬称略、順不同）

個人　内藤きせ、大川原富美子、殿村隆夫、小島茂美、大塚春美。

あとがき

☆表紙の写真は相寿園のご利用者。ご苦労を乗り越えたこの笑顔に、仲間も職員たちも励まされています。

☆佐光紀子様は、著述家、翻訳家、ナチュラルライフ研究家で、50周年誌編纂にあたって大いに協力していただきました。

☆この4月号より通常郵便やヤマト便でのお届けとなります。偶数月発行となりますので、次は6月発行です。〈I〉

寄付金状況報告

（単位：円）

	寄付金	指定寄付金	誌　代	合　計
4月～1月	11,893,048	0	2,088,282	13,981,330
2月	479,892	0	87,308	567,200
計	12,372,940	0	2,175,590	14,548,530